

忘れること、なくなること、そのゆくえについて

—記憶に関わる現場プロジェクトの実践から—

中須賀 愛美 Nakasuka Manami

いち早く人口減少が進む秋田県では、地域の中に見られる多くの空き家に代表されるように、過疎化が問題視されている。このような過疎化に対し、行政処置が行われる一方で、地域活性化によって地域を景気付けようとする動きが秋田県並びに各地方都市で活発になっている。しかし、このような風潮は、しばしば消費される客体としての地域のコンテンツ化を招いており、結果的に地域に「没場所性 (placelessness)」を与えている。本研究では、この「没場所性」に抗するものとして地域が有する記憶に着目し、アートプロジェクトを通じた地域的記憶の可視化について考察を行った。

私が修士課程で行ったプロジェクトは四つあるが、それぞれ記憶の想起と忘却についての思索となっている。一つ目の《空の話》という映像制作では、認知症の女性と秋田の空にまつわる会話をやっている。ここでは、加齢とともに忘却されていく記憶の一方で、忘れがたい秋田の空への愛着を表現しようとした。二つ目は《缶詰のゆくえ》であるが、これは秋田市の缶詰加工所で行ったリサーチと展覧会である。この缶詰加工所では、時期限定で個人が持ち込んだ山菜やキノコを缶詰に加工することができる。ここでは山菜の缶詰化と贈答行為に関して調査を行い、コミュニティ内に保持されている記憶を考察した。三つ目の《投函》は、なくなったポストに手紙を入れる仕草をするパフォーマンスを撮影した映像制作である。ここでは、場の喪失によって人との関わりも喪失されるという様子を示唆することを試みた。四つ目の《うしじまのれんめぐり》というアートプロジェクトでは、なくなっていく商店街で、すでに閉店した店や閉店しかけている店のシャッターの上からのれんをかけた。現在では、ただ通過して行く場所となっている商店街の通りにのれんをかけることで、かつての商店が立ち並んでいた光景の想起や、そこに生まれていたであろう日常的な行為の再現を、通行人が体験することを試みた。最終的に四つのプロジェクトを、展覧会《忘れること、なくなること、そのゆくえについて》においてインスタレーション作品に落とし込んだ。修士研究展は、先の展覧会をブラッシュアップしたものとなる。こうした展覧会は、それぞれ単独だったプロジェクトを、変化の中でこぼれ落ちていくものとして繋いでみながら、「何も無い」と言われる地域の像を改めて結び直す試みであった。

プロジェクトを通して感じたのは、忘れること、なくなることの可視化がもたらすものは、空虚さに対する感傷ではない、ということであった。これらの試みは、そのゆくえに、場と人との関係を意味深いものに至らしめ、地域の集合的記憶に宿る共感を我々の元に導きながら、「今ここに生きていること」として我々の「生」を現在に位置付け直すのである。



1994年広島県生まれ。2018年広島市立大学卒。学士では絵画（日本画）を専攻。修士課程では映像やインスタレーションなど、表現手法を拡大してきた。また、場に介入していくことで開かれる可能性をアートプロジェクトを通して実感し、地域の人と関わりながらプロジェクトを展開してきた。修士研究では地域における歴史化されない記憶の忘却や想起をテーマに取り組み、既存のイメージを超えて地域の像がどのように結び直されるか試みた。



「忘れること、なくなること、
そのゆくえについて」
2020年
インスタレーション、ミクストメディア



(左から)
「空の話」
「投函」
「缶詰のゆくえ」
「うしじまのれんめぐり」